

竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（三）

—— 7 紅葉賀香 ～ 12 須磨香 ——

本稿は、矢野環・岩坪健・福田智子「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介」（『社会科学』第43巻第3号、二〇一三年一月）、および同「竹幽文庫蔵『源氏千種香』の紹介（二） 1 桐壺香 ～ 6 末摘花香」（『社会科学』第43巻第4号、二〇一四年二月）の続編として、7 紅葉賀香から12 須磨香までの六つの組香の翻刻と考察をおこなうものである。資料に関わる基本的な説明は『社会科学』第43巻第3号を参照されたい。また、凡例および香道用語解説は、「同」第43巻第4号に詳述しているので、本稿では、以下にその概略を記すにとどめる。

矢野環
岩坪健
福田智子

一、考察には、（1）竹幽本組香の方法、（2）『源氏物語』との関わり、というふたつの観点を設ける。（1）の冒頭には、構造式を記す。また、解説を要する香道用語には「*」を付す。それらの用語については、「香道用語解説」（『社会科学』第43巻第4号）を参照されたい。

一、巻末には影印を付す。

7 紅葉賀香

【翻刻】

△紅葉賀香

物思ふに立まふへくもあらぬ身の

袖うちふりし心しりきや

凡例

一、翻刻本文は、底本の原態を尊重しつつ、漢字・仮名ともに通行の字体を用い、適宜、句読点を施す。また、朱書きには、「（朱）」と示し、一面の終わりには「〴〵」を付して丁数を記す。

- 一 一炷開也。
- 一 十炷香の札を用ゆ。
- 一 一二三ウの香、各三包、都合十二包打交、其内より二包除遣残十包出香とす（地香外に捨。試に出す。）〔二十オ〕
- 一 光源氏方五人、頭中将方五人と分つ（光源氏方。上座氏方。）
- 一 客地香、独聞の差別なく、双方の中数進むべし。双方持の時は、双方一間充進むべし。
- 一 初め一炷目中ると、双方の内、何炷多ても幕をしほる斗なり。二炷目の出香より段々人形進むべし。
- 一 源氏方にて七間進と、かざしの紅葉を冠の巾子・纓（コジ、タイ）との間にはさむ也（左より右へ。右より左にさすべし。）十五間目に至ると紅葉を菊にさしかゆる也。〔二十ウ〕
- 一 中将方にて七間進と、かざしの桜を冠の巾子と纓との間にはさむ也（右より左にさすべし。）十五間目に至ると、桜を取て扇を持する也。
- 一 双方の内にて、十九間目の幕をしほり、内に入ると、勝負極る也（幕をしほる。も一炷なり。）其次を聞は、二十間目に至り、幕へ入る也。一方、幕に入れば、香は終らずとも、盤の勝負は終る也（盤をしほるも、幕の内に入るも、閑勝。数に拘わらず一炷に一度充也。）
- 一 記録は、中斗を記す。認様左のごとし。〔二十一オ〕

紅葉賀香の記

〔表〕〔二十一ウ〕

紅葉賀香立物圖

〔図〕〔二十二オ〕

〔図〕〔二十二ウ〕

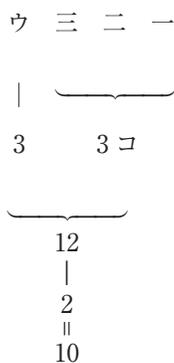
同盤の圖

豎溝二筋 横界二十間

〔図〕〔二十三オ〕

【考察】

（1）竹幽本組香の方法



* 試香は、「二」「二」「三」の香を一度ずつ計三度、それから本香が、「二」「二」「三」「ウ」の香、各三包から二包除き、十度出香される。* 十炷香札を用いた。* 一炷開の盤物である。

まず連中を、上座の光源氏方五人と、頭中将方五人に分ける。そして、* 客香・* 地香の区別なく、聞き当てた数だけ人形を進める。独聞でも、二炷聞以下の場合でも、点数には区別がない。また、双方聞き当てて、「持」（引き分け）の時も、双方で一間ずつ進める。ただし、一炷目を聞き当てた時は、それが何人であつ

でも、幕を絞るだけで、人形を進めることはない。人形を進めるのは、二炷目以降である。

源氏方では、七間進んだところで、かざしの紅葉を、冠の巾子と櫻との間に、左から右へ差し挟む。十五間目に進むと、紅葉を菊に持ち換える。

中将方では、七間進んだところで、かざしの桜を、冠の巾子と櫻との間に、右から左へ差し挟む。十五間目に進むと、桜を扇に持ち換える。

源氏方、中将方のどちらかが、十九間目に進み、さらに一炷を聞き当てると、幕を絞り、これで勝敗を決する。その次を聞き当てた場合は、二十間目に至り、人形は幕に入る。これで、盤の勝負自体は完結する。

肝要なのは、幕を絞ったり、幕の内に入ったりするのにも、一炷聞き当てなければならないことである。

蘭之園本では、盤物の場合と、盤を用いない場合とを説明している。前者は、「舞楽香」の作法で行うといい、『香道蘭之園』四巻所収「舞楽香」と竹幽本の内容は、ほぼ一致する。後者の場合、蘭之園本は、「紅葉」と「菊」の香、各四包と、「舞」の香二包の計十包を本香とし、試香は「紅葉」と「菊」。二炷間で、「初紅葉」「むら紅葉」「紅葉衣」「初菊」「菊がさね」「菊衣」「青海波」「かざしの紅葉」「かざしの菊」の九つの「聞きの名目」

を示す。

(2) 『源氏物語』との関わり

光源氏が十八歳の十月のこと、行幸で披露される雅楽「青海波」の試楽（今でいうリハーサル）が、藤壺の前で行なわれ、源氏の舞は絶賛された。その翌日、源氏が藤壺に送った和歌が巻名歌^①である。このとき藤壺は源氏の子を身ごもっていたが、世間では桐壺帝（源氏の父）の御子と思われていた。巻名歌には、秘密を分かち合う相手にのみ伝わる思いが詠みこまれている。

本番の行幸では、源氏と頭中将が「青海波」を舞った。

かざしの紅葉いたう散りすきて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて左大将さしかへたまふ。
(三一五頁)^②

紅葉賀香でも、その様子が再現されている。それに合わせてか、頭中将は「かざしの桜」を「扇」に替えるが、物語ではそのような記述はない。紅葉の折節なので、桜は季節はずれだが、盤上に桜と楓の木を立てるので、それに倣ったのであろう。

8 花宴香

【翻刻】

△花宴香

いつれそと露のやどりをわかむまに

小笹がはらに風もこそふけ

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三の香、各三包充、客香三包三種別香、三種ヲ用、都合十二包出香と

す。

一 一二三の香、外に拵へ、出香六炷終て、試に焚出す。客香(二十三ウ)は試なし。

(二十三ウ)は試なし。

一 出香十二包打交、其内六包取て、一炷間に焚出すと、連座

各同香別香の續を聞覚へ置くべし。六炷終て、試三包を焚

出し聞せて、後に折居六ツ重て廻し、試に合せて順々に札

を受け、記録に記し、扱て残六包を、又一炷充焚出す。此

時は一炷毎に札筒を廻し、札を受るべし。香色紙は十二炷(二十四オ)皆終て開くなり。

(二十四オ)皆終て開くなり。

一 記録認様、間違たるは札銘を記し、聞中たるは褒美として

左のことく記す也。

一の香聞たるは 詩と書

二の香聞たるは 楽と書

三の香聞たるは 扇と書

客の香聞たるは

南殿桜と書(二十四ウ)

〔朱〕初六炷の内

客香独聞四点、二人より三点充、地香独聞三点、二人よ

り二点充也。聞違星なし。

〔朱〕後六炷の内

客香二点。聞違星二ツ。

地香一点。聞違星一ツ。各独聞の差別なし。

点星は消合て、聞の下に認べし。

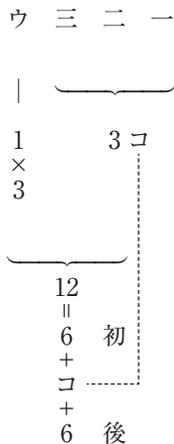
一 記録書様左に記す。(二十五オ)

花宴香之記

〔表〕(二十五ウ)

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



初段と後段の本香の間に、試香を行う。準備する香は、「一」
「二」「三」の香が各三包、「ウ」は別の香を三種類必要とする。
*香元から、まず初段の本香として、「一」「二」「三」の香を一

度ずつと、「ウ」の香三種類の計六回、香炉が回される。次に、試香を「一」「二」「三」の順に回し終わったら、折居を六つ同時に回し、前段の香の答えを十炷香札で答える。

本香の後段は、残り六包を、前段と同じように一炷間で答えを出す。ただし、この時の答えは、十炷香札を札筒に入れる。

十二炷すべて聞き終わった時点で、正答を公表する。

香之記は、聞き違いには札銘を記すが、聞き当てたものには、褒美の文言を記す。すなわち、「一」には「詩」「二」には「楽」、
「三」には「扇」「ウ」には「南殿桜」である。

得点は、初段の場合、客香の独聞は四点、二人からは三点ずつ、地香の独聞は三点、二人からは二点ずつである。聞き違えても、星は付けない。

後段の得点は、客香は、聞き当てれば二点ずつ、聞き違えれば星が二つ付く。地香は、聞き当てれば一点、聞き違えは星一つ。何人聞き当てたかで得点の多寡はない。

蘭之園本では、地香は「花」「宴」「詩」の香、各一包（試みあり）、客香は、「扇」の香三包（試みなし）の、計六包を準備し、地香と客香を一包ずつ組み合わせて、二炷間を三度おこなう。「聞きの名目」は、「南殿の桜」「霞める月」「三つの口」「朧月夜」「春の鶯」「小笹原」の六つを用いる。竹幽本の前段・試香・後段という構成と比較すると、簡略な組香となっている。

（2）『源氏物語』との関わり

当巻の冒頭文は、「二月の二十日あまり、南殿の桜の宴せさせたまふ。」（三五三頁）である。南殿とは紫宸殿のことで、その前にある左近の桜が満開の折、そのもとで天皇主催の宴が開かれた。出席者は漢詩を作文したが、なかでも光源氏の詩作は賞賛的であった。次いで、舞楽も披露された。

その夜ふけ、源氏は見知らぬ女性（朧月夜の君）と偶然出会い、名前を聞くが答えてはくれない。さらに尋ねたのが巻名歌である。結局、女性の正体が分からないまま夜明けを迎え、扇を逢瀬の記念として交換して別れた。

花宴香で褒美として記録に記される名目は「詩」「楽」「扇」「南殿桜」である。このうち「扇」は逢瀬の場面、ほかの言葉は宴会の場面に見られる。

9 葵香

【翻刻】

△葵香

はかりなき千尋のそこのみるふさの

おひゆくすゑは我のみぞ見ん

一 一炷開也。

一 十炷香の札を用ゆ。

- 一 連中十人の内、五人宛組合せ、座席を定めて、試香を出すべし。十炷焚終り、勝負極りて」(二十六オ)後に、勝たる方を葵上方、負たる方を御息所方と記録すべし。是は、六條の御息所と葵上と、加茂の祭の車争に準へて、かく組侍る。
 - 一 一二三客の香、各三包、已上十二包の内、二包除け、残り十包出香とす地香、外に拵へ。試香に出す。
 - 一 勝負の場に、車二輛並置き、客香地香の差別」(二十六ウ)なく、双方の間数を消合せて、多き方一間充進む間数の多数に不均一間充進む也。聞少き方は、一間充退く也。客独間は二間進む不聞方は二間退く。双方持の時は、進退なし。早く行着たる方勝也。もし香終らず半にも成らざる時は、又車をむけ直し、前の如く進退すべし。此時は、勝負の場に早く至るを、二の勝と定め、盤の勝負は終る也。」(二十七オ)
 - 一 早く行着たる上にて、負たる方進みて、勝たる方の進と同前に相並時は、双方持と定めて盤の勝負は終るべし。
 - 一 勝負極て後に、負たる方の葵は取去べし。
 - 一 記録は中り斗を記す。認様左のごとし。」(二十七ウ)
- 葵香記
- 〔表〕」(二十八オ)
- 葵香立物圖
- 盤の上にかざる

御所車 二ツ

負たる方の葵は取さるべし

榊 四本 盤の四方に立る

葵 二枝車の前にかけ置く

〔圖〕」(二十八ウ)

〔圖〕」(二十九ウ)

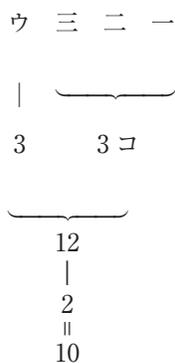
同盤の圖

豎溝二筋 横界十間 真中に勝負場有

〔圖〕」(二十九ウ)

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



* 試香は、「一」「二」「三」の香を一度ずつ、計三度回す。それから本香が、「一」「二」「三」「ウ」の香、各三包から二包除いて、十度出香される。*十炷香札を用いた一炷開の盤物である。記録には、聞き当てた分のみを記す。

まず、連中を五人ずつ二組に分け、座席も定める。ただし、勝

負が決した後、勝った方を「葵上方」、負けた方を「御息所方」として記録する。

盤の中央、勝負の場に、車を二両、逆方向に並べて置く。聞き当てた人数が多い組が一両進み、少ない組は一両退く。聞き当てた人数の多寡によって、進退の間数が変わることはない。ただし、客香の独間は二両進み、相手方は二両退く。聞き当てた人数が同数の場合、進退はない。こうして、二両の車が、押したり引いたりするように車を動かしていき、五つの升目を先に行き着いた組を勝とする。

もし、十度の本香の途中で、車が五つの升目の半分も動かなかった時は、片方の車を逆向きに置き直し、二両の車を盤の中央に向けて、前述と同様に動かす。この場合は、盤の中央（勝負の場）に早く行き着いた組を勝とする。これを「二の勝」という。なお、本香が終わるまでの間に、相次いで行き着いた時には、「持」（引き分け）とし、勝負を終える。勝負を決した後には、負けた組の車の葵を取り去る。

蘭之園本は、竹幽本と同じく盤物であり、車の進め方も、間数に違いこそあれ、ほぼ同様と見られるが、盤の中央の柵に向かって、二両の車をそれぞれ両端から五間目に置く点が大きく異なる。その柵の前に行き着いた組を勝とし、また、相手方を「人たまひ」と呼ぶ盤の端、一間目に追い込んだり、盤から落と

したりしても勝となる。

（2）『源氏物語』との関わり

桐壺帝（源氏の父）が退位して朱雀帝（源氏の兄）が即位すると、斎院も交代する。斎院とは、賀茂神社に奉仕する未婚の皇女である。新しい斎院は賀茂川の川原で禊をする決まりがあり、そのお供に源氏も参加することになった。

あの光源氏を一目見ようと、大勢の人が朝早くから集まった。葵の上は源氏の子を身ごもり気分がすぐれず行く気がしなかったが、人々に勧められて昼ごろに出かけた。すでに大通りには牛車がいっぱい並んでいて、停める場所などない。けれども源氏の正妻という地位を利用して、車をみな立ち退かせたが、どうしても動こうとしない車がある。それは源氏の恋人である六条御息所の車であった。葵の上の家来の方が多くて、六条御息所の車は後ろに押しつけられてしまった。これを車争いと呼び、その様子が盤上で再現される。

その後、賀茂の祭（現在の葵祭）が催され、それを源氏は若紫と一緒に見に行くことにした。若紫の長い髪の毛を切りそろえ、二人の将来を祝福して詠まれたのが巻名歌である。

10 賢木香

【翻刻】

△賢木香

神垣はしるしの杵もなきものを

いかにまかへておれる榊ぞ

一 試なし。

一 源氏方五人、斎宮方五人と分つ源氏方、上座也。

一 宮の香三包、鳥居の香三包、杵の香二包、榊の香二包各、都

合十包聞香とし、二包充組合置て」(三十オ)二炷聞に焚出す。

皆終て包紙を開くべし。

一 札は無試十炷香のことく同名上下結たるを中りとす。しか

し十炷香とは違ひ、始に打札の極なく心次第銘々に札順を

立てうつべし。

一 源氏方は一炷聞て札をうつ。斎宮方は二炷聞て札を打也。

香組合 并 二炷聞札打様左のごとし」(三十ウ)

宮くゝと出たるは 野、宮の札

鳥居くゝと出たるは 黒木の鳥居の札

榊くゝと出たるは 榊の札

杵くゝと出たるは しるしの杵の札

鳥居宮と出たるは 火たき屋の札

宮鳥居と出たるは 夕月夜の札

宮杵と出たるは むしの声の札

杵宮と出たるは 八十瀬の浪の札

榊宮と出たるは 神垣の札

鳥居榊と出たるは 小柴垣の札

鳥居杵と出たるは 伊勢までの札

杵鳥居と出たるは 鈴鹿川の札

榊杵と出たるは いかにまがへての札」(三十一オ)

一 此内より五組取用ゆ。同組無き様に結合置べし。

一 記録点は、地香何人間にても一点充、客香何人間にても二

点充也。客を地香の内と聞違たるは星二ツ附るべし。

一 札数十人分百二十五枚。

一 札表は十炷香の札紋に同じ。

源氏方は壹人前十二枚別札二枚、残る、五人分六拾枚、」(三十一ウ)

裏 宮 鳥居 杵 榊 各三枚充。

斎宮方一人前十三枚八枚、残る、五人分六拾五枚。

野々宮 黒木の鳥居 榊 しるしの杵

火たき屋 夕月夜 むしの声 八十瀬の浪

裏 神垣 小柴垣 伊勢まで 鈴鹿川

いかにまがへて

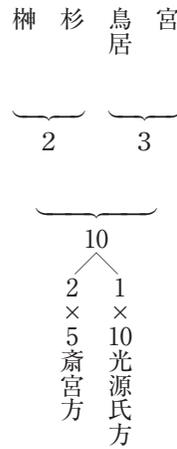
一 記録認様左のごとし。」(三十二オ)

賢木香の記

〔表〕（三十二）

【考察】

（一）竹幽本組香の方法



連中を、源氏方（上座）・齋宮方、各五人に分ける。試香はな
く、本香は、「宮の香」「鳥居の香」を各三包、「枚の香」「榊の
香」各二包の計十包を準備する。このうち、「榊の香」は客香で
ある。これらの香を、二包ずつ組合せ、二炷間とするが、源氏
方は一炷ごとに、齋宮方は二炷ごとに札を打つ*。

札は、専用のものを、十人分で百二十五枚準備する。源氏方
は一人分が十二枚、齋宮方は十三枚である。札の表は、十炷香
札の紋と同じだが、札裏は、源氏方と齋宮方と異なる。すな
わち、源氏方は、「宮」「鳥居」「枚」「榊」を各三枚計十二枚、齋
宮方は、「野々宮」「黒木の鳥居」「榊」「しるしの枚」「火たき
屋」「夕月夜」「むしの声」「八十瀬の浪」「神垣」「小柴垣」「伊
勢まで」「鈴鹿川」「いかにまがへて」を各一枚計十三枚を準備
する。

試香がないため、最初の地香には任意の札を打ち、これを基
準として、同香・異香を聞き分ける。客香には「榊の香」を割
り当て、全四種類の香を分別する。源氏方は、一炷ごとに札を
打つ（札は、十二枚準備して十枚使用するため、二枚余る）。一
方、齋宮方は、二炷組み合わせて札を打つ（札は、十三枚準備
して五枚使用するため、八枚余る）が、客香である「榊の香」
が一炷入る組合せは、「榊の香」が一炷目、二炷目のいずれに出
たかは考慮する必要はなく、順不同で答えることができる。香
元は、この十三種類の組合せの中から、重複することなく、五
組を選んで香を準備しておく必要がある。

すべての香を焼き終わってから、包紙を開き、正答を披露す
る。二炷ともに聞き当てた場合に得点となる。地香は各一点、客
香は各二点。客香を地香と聞き違った場合は、星を二つ付す*。

蘭之園本は、竹幽本と準備する香の種類と数は同じであるが、
「宮」「鳥居」「杉」の香には試香があり、連中を分けることなく、
二炷間でおこなう。竹幽本の齋宮方と同じ十三の「聞きの名目」
が列挙され、客香が入る場合は、二炷のうちの前か後かは問わ
ないのも、竹幽本と同様である。この蘭之園本の組香を齋宮方
に置き、源氏方の一炷間と組み合わせたのが竹幽本であろう。試
香がないことで難易度も高く、より複雑な組香となったと言え
ようか。

(2) 『源氏物語』との関わり

記録の名目は全部で十三あり、すべて蘭之園本と共通する。それらを『源氏小鏡』所収の寄合³と比較すると、蘭之園本が利用したと推定される第一系統第一類⁵には、巻名歌にある四語「榊」「しるしの杉」「神垣」「いかにまがへて」と「火たき屋」以外の八語は、寄合として挙げられている。「火たき屋」は第一系統では梗概文の中にあるが、第三系統第二類(道安系統)には寄合として引かれている。

そのほか竹幽本も蘭之園本も「小柴垣」であるのに対して、『源氏小鏡』の第一系統第一類では「しばがき」であるが、道安系統では「小柴垣」である。一方、竹幽本と蘭之園本そして第一系統第一類も「むしの声」であるのに、道安系統は「むしの音」で、「音」の方が物語本文に合う。このように記録の名目とすべて合致する『源氏小鏡』は見当たらない。

巻名歌にも寄合にも見出せず『源氏小鏡』の文章にのみ見られる語、あるいは寄合にあるものの本文が少し異なる語を、系統別に列挙すると、次のようになる。

- 1 第一系統第一類―ひたきや。しはかき。
- 2 第一系統第二類―ひたきや。
- 3 第一系統第四類―ひたきや。しはかき。虫の声々。
- 4 第二系統―ひたきや。しはかき。

5 第三系統第二類(聖護院系統)―ひたき屋。

6 第三系統第二類(道安系統)―むしの音。

7 第三系統第三類―野の宮。虫のこゑ。

8 第四系統(神宮文庫本)―火焼屋。柴垣。むしの声々。

9 第四系統(大阪市立大学本)―火たき屋。しは垣。虫のこゑ。

右記の中で、「しばがき」(柴垣)と「こしばがき」(小柴垣)、「虫の声」と「虫の音」の異同はさておき、「ひたきや」は連歌の世界では寄合ではなかったのに対して、香道では記録の名目にされている。武居氏は名目の典拠を調査されて、寄合によるものを受動的受容、それ以外によるものを能動的受容と分類された。⁶その説によると、「火たき屋」は能動的受容の唯一の例になる。

さて、十三の名目のうち四語は巻名歌に使われ、別の三語(鈴鹿川)「八十瀬の波」「伊勢まで」は次の和歌に見られる。

鈴鹿川八十瀬の波にぬれぬれず伊勢まで誰か思ひおこせむ
(九四頁)

ほかの六語を用いて、当該場面のあらすじを紹介する。

前の巻(葵の巻)で賀茂の齋院が交代したように、伊勢神宮に仕える齋宮も新たに六条御息所の娘が選ばれた。六条御息所は光源氏との仲をあきらめ、娘に付き添って伊勢へ下向するこ

とにした。源氏は六条御息所を引き止めるため、齋宮が心身を清めて籠もっている「野々宮」を訪れた。晩秋の嵯峨野は秋の花も「虫の声」も衰え、二人の仲を象徴していた。母娘が住むところは「小柴垣」に囲まれ、「黒木の鳥居」が立てられ、「火たき屋」(番人が警固のために篝火をたく小屋)の明かりがかすかに見えた。折しも「夕月夜」(上旬の月)に照らされた源氏は、手に持っていた榊の葉のように変わらぬ思いを六条御息所に訴えた。それに対して和歌で答えたのが、巻名歌である。結局、六条御息所は伊勢へ赴き、源氏の恨みの歌に対する返歌が、前掲の歌「鈴鹿川」である。

11 花散里香

【翻刻】

△花散里香

橘のかをなつかしみほと、ぎす

花ちる里をたづねてぞとふ

一 試なし。

一 十炷香の札を用。

一 宿垣根^{ヤドノカキネ}の香、五月雨^{サミダレ}の香、軒^ノのつまの香、各二包充、橘の

香一包^也。時鳥^{トキトリ}の香一包^{客香}、以上八包出香とす。(三十三オ)

一 初炷香に包紙七包^{表に橘を置く、裏に金なり。}

^{カウシヤ} 隱名 宿垣根 五月雨 軒のつま 各二包充橘一包認る
後炷香に包紙八包^{表に時鳥を置く、裏に銀なり。}

一 隱名七包は初炷の通に同じ。外に時鳥一包認る。

一 出香の包分様は、先づ時鳥の香を、後炷の包紙に包除置、残七炷の香を初炷の包紙に包みて後炷の包紙には香入らず置く也。初宿と後宿とは結となす。五、軒、橘も初後一包^(三十三ウ)充同名を一結となし、都合七結打交、いつれより成とも一炷充焚出す。初包紙は鶯へさし組合たる後、包紙は其脇に置くべし。扱て出香一炷一順回りに香元へ戻ると焚殻^{タキカラ}を脇に置たる後の包紙に包置き、又次の一包を焚出す。七包ともに其式等し。焚殻七炷、皆包終て能打交、其内一包除^{此一包は不用。}初に除置たる時鳥の香を加へ、又七色とし、再打交一炷充焚出し、十四炷皆^(三十四オ)聞終て、一同に包紙を開く也。

一 出香は二度焚返す故に、連中多き時は通り難し。又香木も其心得して火末永き木を用ゆ。火あいに習有。

一 聞様は、十四炷ともに無試十炷香の通りに、順を立て札打也。初炷七包に打たる札七枚を記録に写留て不残連中銘々へ返し、後の七炷に又打するべし。

宿垣根(朱) 一の札 五月雨(朱) 二の札^(三十四ウ)

軒のつま (朱) 三の札 たち花 (朱) ウの札

時鳥 (朱) ム札二枚打

一 記録点は、時鳥香三点、橘香二点、地香一点充也。各独聞の差別なし。初七炷は無試十炷香の通り上下結たるに点を掛る。後七炷の点掛様左のごとし。

初二炷結中

後二炷結中 各一点充 合四点也 (朱) (三十五オ)

初二炷結中 各一点充

後 初二炷結中 各一点充 合三点也 (朱)

初 初二炷結中 各一点充

二炷結すとも初二炷結たると
同札打は其一炷は中とし一点也
同札打は其一炷は中とし一点也

後二炷結中 各一点充 合三点也 (朱)

初二炷結中 各一点充

後二炷不結 点なし 合二点也 (朱) (三十五ウ)

初二炷不結 点なし

後二炷結中 各一点充 合二点也 (朱)

初炷と後一炷と結たるは点なし

初橋中

後橋中 各二点充 合四点也 (朱)

初橋中 二点

後橋外 点なし

初橋外 点なし

後橋中 中たれとも
点なし

時鳥香には時鳥の札^ウ一枚を中とす。三点充也。」 (三十六オ)

一 出香と打札と同名異名に抱はず無試十炷香の通りに順を立て打べし。時鳥の札斗りに同名を用ゆ。点甚紛敷故に艸稿を設け、同香を集て点を定むる。其式こ、に出す。

出香并札打之順艸稿 (三十六ウ)

〔表〕

右のごとく艸稿に札を写し、包紙を開き香名を認て、其上にて同香を集て点を極る左のごとし。」 (三十七オ)

同香寄点定艸稿 宿一炷除 (朱)

〔表〕

初の一炷と後の一炷と結たるは点なし。合印にて知るへし。
(朱) (三十七ウ)

右の点を以て記録に写す。記録には本哥の上七文字と下七文字を上下に認て、其字に當て点^{アテ}をかくる。皆中は褒美に聞の下に中川と認るべし。香本に初の七包を全字に認め、後の七包は朱にて一字充認てよし。

宿五五軒橋
かおなつかしみ

どれかを聞き分ける。一種類の地香を、初炷・後炷で四包全部聞き当てた場合は計四点、初炷で地香のペアを当て、さらに後炷で同香一つを当てた場合や、その逆に、初炷の地香一つと同香のペアを後炷で聞き当てた場合は、計三点が与えられる。また、初炷と後炷、いずれかにおいてペアを当て、その一方では二包とも外した場合は二点となるが、初炷の一包と後炷の一包を当てても得点にはならない。客香「橘」は、初炷・後炷ともに当てれば計四点、初炷のみ当てても二点が加えられるが、後炷のみ当てた場合は得点にならない。

記録は、得点の計算が複雑であるため、まず草稿を作成する。すなわち、初炷・後炷を上段と下段に分け、出香の順に記録する。その上で、同香をまとめた表を作成し、得点を算出する。表は上から「宿」「五」「軒」「橘」「時」の段に分け、「時」を除く格段を初炷・後炷に分ける。地香「宿」「五」「軒」はさらに各段を二段に分け、全部で十五段の表とする。このうち一段は、後炷で除いた香一包にあたるため「除」と記す。記録には、まず、上から十四段目までの答えを初炷・後炷、七文字ずつに分け、それぞれ、「かをなつかしみ」「たつねてそとふ」という本歌に一文ずつあてはめ、得点分の合点を付す。なお、先に「除」と記した場所は「時鳥の座」といい、後炷の客香「時鳥」の点を記入する。すべて聞き当てた場合には、褒美として、記録の下

方に「中川」と記す。

蘭之園本は、試香のない香（地香）を別の香で五包準備し、試香のある香（客香）一種類、五包とペアにし、二炷聞とする。地香は聞捨とし、客香のみを「聞きの名目」で答える。すなわち、二炷のうち、客香が後に出た場合はすべて「中川」、先に出た場合は、香炉が廻ってきた順に「橘」「香をなつかしみ」「時鳥」「花散里」「尋ねてぞとふ」である。竹幽本に比べて、簡便な組香になっている。

(2) 『源氏物語』との関わり

客香の名称に使われた「橘」と「時鳥」は、巻名歌による。ほかの「宿垣根」「五月雨」「軒のつま」も物語中の和歌による。

A をち返りえぞ忍ばれぬほととぎすほの語らひし宿の垣根
に (一五四頁)

B ほととぎす言問ふ声はそれなれどあなおほつかな五月雨
の空 (一五五頁)

C 人目なく荒れたる宿は橘の花こそ軒のつまとなりけれ
(一五七頁)

皆中（すべて聞き当てたこと）のときに記す「中川」は、物語の地の文に見られる。それは賀茂川（東川）と桂川（西川）

の間にあり、平安京の東の端を流れていた川である。中川のあたりに住む女性に源氏が詠み入れた和歌が右記の歌Aで、「宿の垣根」はその女性の家を指す。それに対する返歌がBである。そのあと源氏が麗景殿の女御の邸宅を訪れて詠んだのが巻名歌で、その返しがCである。

『源氏物語』による言葉を『源氏小鏡』で調べると、「宿垣根」と「五月雨」は第一、第四系統全本の寄合にある。逆に「軒のつま」は寄合には見られず、その語を含む和歌が第三系統第三類のみ引かれている。「中川」を寄合に挙げているのは第三系統第二類（道安系統）しかなく、第四系統（大阪市立大学本）には見られず、ほかの伝本では梗概文にある。よって寄合・和歌・地の文において、すべての言葉を含むのは第三系統第三類のみである。

12 須磨香

【翻刻】

△須磨香

うきめかるいせをのあまを思ひやれ

もしほたるてふ須磨のうらにて

一 十炷香の札を用ゆ。

一 一二三の香、各三包充、客香二包一包充別香、用ゆ、都合十一包の内、

十包出香とし、皆焚終て包紙を開くべし。

一 一の香斗り外に拵へ、試に出す。其外試なし。」（三十九オ）

一 一の香二包、二の香三包、客香一包、以上五包打交、大包にして、初炷と號く。一の香二包、三の香三包、客香一包、以上六包打交、其内一包取除、残り五包、又大包にして、後炷と號く除たる一包、不用。初炷五包を二炷間一度、三炷間一度と、兩度に香爐二つにて廻し、五炷焚終て、折居二と五と廻し札を受けて、又後炷五包を前のごとく焚出して、折居七六と八九と廻し、札を受けて包紙を初後一同に開くべし。」（三十九ウ）

一 香の出様によつて名目認様左のごとし。

二炷間の時

一ウ（朱） 若木の桜

（二三）（朱） 十五夜

（三ウ）（朱） 松の柱

（三三）（朱） 札の神

三炷間の時」（四十オ）

一ウ（朱） 綱手なは

ウ一（朱） とこ世

（二三）（朱） 鏡の影

（三三）（朱） 伊勢の使

（三三）（朱） 春の盃

（三三）（朱） 引手の綱

（二三）（朱） 初戸

（三三）（朱） 峯の霞

（三三）（朱） 色／＼の紙

（三三）（朱） 藻塩たる

（三三）（朱） 加茂の瑞籬ミツカキ

（三三）（朱） 琴の音

（三三）（朱） 詠る月

（三三）（朱） 竹の垣

(三ウ三) (朱) 巳日の襖(ミンキ) (ウ三三) (朱) 寢覚の床
 (一ウ三) (朱) 友千鳥 (二三ウ) (朱) 都の花
 (四十ウ)

(三ウ一) (朱) ひち笠の雨 (ウ三三) (朱) 波こ、もと
 (ウ三) (朱) 立来る浪 (三三ウ) (朱) 柴の煙
 (三三三) (朱) 四方の嵐

一 記録点は、初客独聞三点、二人より二点充、後客独聞四点、二人より三点充也。初客聞違何人にも星一つ充、後客聞違何人にも星二つ充附る。一の香は試を聞たる故に一の札を打ざるは中に非ず、点なし。聞中たるは何人にも一点充かくる。又二三の香は試なき故に上下結ざるは中に非ず、(四十一オ)是も点なし。聞中たらば独聞二点、二人より一点充かくるべし。客香聞中たるは褒美として左の哥を認る。両客聞たるは全首、初客聞たるは上の句、後客聞たるは下の句を朱にて聞の下に認るべし。記録大概次に出す。

褒美哥

雲近く飛かふ田鶴も空にみよ

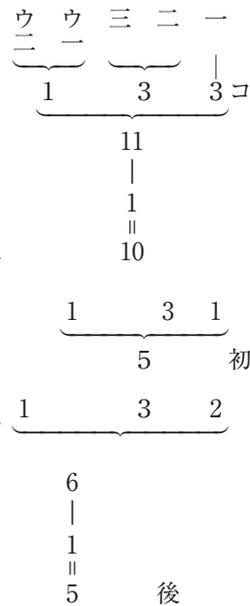
我は春日のくもりなき身ぞ (四十一ウ)

須磨香之記

〔表〕 (四十二オ)

【考察】

(1) 竹幽本組香の方法



本香は、「二」「三」の地香を各三包、客香を二種類各一包の全十一包から一包を除き、十包を出香とする。試香は「一」のみで、他の香は試みがない。すべて焚き終わってから答えを披露する。

本香は、初炷・後炷に分かれる。初炷は、「一」一包、「二」三包、「ウ」^{*}一包の五包、後炷は、残りの「二」二包、「三」三包、「ウ」一包の六包から一包を除いた五包である。つまり、初炷には「三」を用いず、また、後炷には「二」を用いない。また、「ウ」は、初炷には必ず一包、後炷には一包あるか、あるいはないか(除いた一包が「ウ」の場合)ということになる。

初炷・後炷は、それぞれ二炷聞と三炷聞にする。香炉は二つずつ廻していき、五炷聞き終えてから折居に札を打つ。包紙を開いて答えを披露するのは、本香をすべて焚き終わってからで

ある。

なお、「聞きの名目」は、二炷間には八通り、三炷間には十九通りが示される。前述のとおり、初炷には「三」を用いず、後炷には「二」を用いないため、「二」と「三」の香に閃く「聞きの名目」は、初炷と後炷で同じものを用いて支障はない。

得点は、初めに出了た客香の独間は三点、二人からは二点、後の客香の独間は四点、二人からは三点とする。初めの客香を外した場合は星を一つ、後の客香の場合は星二つを付す。「一」の香は試みがあるので、必ず「一」の札を打ち、聞き当てた場合は一点とする。試みのない「二」「三」の香は、出香の順に「二」「三」の札を打ち、同香の組合せを聞き当てることにより、独間は二点、二人からは一点を得る。

客香二包を聞き当てた場合は、褒美に「雲近く飛かふ田鶴も空にみよ 我は春日のくもりなき身ぞ」という歌を、聞きの名目の下に朱書する。初めの客香のみ当てた時は上句を、後の客香のみでは下句を書く。

蘭之園本は、試香のある「一」「二」の香を各四包、試香のない「源氏」の香二包を準備し、「一」「二」の香、各二包に「源氏」の香、一包の計五包を二組作り、前段と後段に分け、二炷間と三炷間にする。竹幽本に比べると簡略な構成である。蘭之園本・竹幽本の両者に見られる「聞きの名目」は、二炷間では

「若木の桜」「松の柱」「竹の垣」、三炷間では「伊勢の使」「寝覚の床」「友千鳥」「ひち笠（の）雨」「立来る浪」「柴の煙」「四方の嵐」が挙げられるが、一方、蘭之園本にのみあるものとしては、二炷間では「庭の遣り水」「源氏」「須磨」、三炷間でも、先の「源氏」「須磨」の他、「頭中将」や「みちのく紙」「花の盃」「巳の日の祓」「波こしもて」が列挙される。特に三炷間の「花の盃」以降の三つについては、竹幽本ではそれぞれ「春の盃」「巳の日の禊」「波こも」といった類似する語句が用いられており、蘭之園本を竹幽本が修正したものかとも考えられる。

(2) 『源氏物語』との関わり

竹幽本に列挙された記録の名目は二十七あり、そのうち蘭之園本と共通するのは次の十三語である。

若木の桜・松の柱・竹の垣・伊勢の使・春の盃・巳日の禊・寝覚の床・友千鳥・ひち笠の雨・波こもと・立来る浪・柴の煙・四方の嵐

右記のうち、「波こも」と「柴の煙」以外は寄合である。その二語も梗概文の「波こも」とに立ちくる心地す」「柴といふもの折りくぶる煙」に見出せる。

逆に蘭之園本にない十四語はすべて寄合ではなく、多くは登

場人物の詠歌による。竹幽本の名目をすべて用いて、須磨の巻のあらすじを記すと、以下のようになる（名目には傍線を付した）。

源氏に敵対する勢力は、日増しに強くなった。このままでは無実の罪を着せられ、流罪にされるかもしれない、と悟った源氏は、そうなる前に自ら須磨へ退くことにした。源氏は最愛の女性、紫の上に次の和歌を送った。

身はかくてさすらへぬとも君があたり去らぬ鏡の影は離れ
じ (二七三頁)

また、父帝のお墓に参る途中、下鴨神社が遠くに見え、家来と和歌を詠み交わした。

ひき連れて葵かざししそのかみを思へばつらし賀茂のみつ
かき (二八一頁)

うき世をば今ぞ別るとどまらむ名をばただすの神にまか
せて (二八一頁)

墓前では、亡き父の姿が幻に見えて、源氏は和歌を詠んだ。

なきかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲がく
れぬる (二八二頁)

源氏と藤壺との間に生まれた御子は、東宮になっていた。源氏から別れの和歌が届くが、まだ八歳の東宮には事情が理解できない。

いつかまた春のみやこの花を見ん時うしなへる山がつにし
て (二八二頁)

須磨に着いた源氏が振り返ると、都の方は霞でさえざられて
いる。源氏は涙を抑えつつ詠作した。

ふる里を峯の霞はへだつれどながむる空はおなじ雲居か
(二八七頁)

伊勢にいる六条御息所に、源氏は次の和歌（巻名歌）を送り、
伊勢の使（一九三頁）に持たせた。

うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしほたるてふ須磨の
浦にて (二九四頁)

夜中に源氏が目を覚まして四方の嵐（一九九頁）を聞いてみると、「波ただここともとに立ちくる」⁸ような気がした。昼間は気晴らしに「いろいろの紙」（二〇〇頁）に和歌を書いた。秋になり、雁の鳴き声が聞こえて、源氏は和歌を詠んだ。

初雁は恋しき人のつらなれや旅の空とぶ声の悲しき

（二〇一頁）

そばにいた家来も、唱和した。

心から常世を捨てて鳴く雁を雲のよそにも思ひけるかな

（二〇二頁）

しばらくして、十五夜（二〇二頁）の月が輝きだし、都で開かれていた月の宴を懐かしんだ。

以前に源氏と交際していた女性が、家族と一緒に船で須磨を通り過ぎることがあり、二人は和歌を贈答した。

琴の音に引きとめらるる綱手縄たゆたふ心君知るらめや

（二〇五頁）

心ありて引手の綱のたゆたはばうち過ぎましや須磨の浦波

（二〇五頁）

源氏の住まいの後ろにある山から、柴の煙が流れてきた。夜はなかなか眠れず、夜明け頃、千鳥の鳴き声が聞こえて、源氏は寝たまま詠じた。

友千鳥もろ声に鳴くあかつきはひとり寝ざめの床もたのもの
し

（二〇九頁）

須磨に移り住んだときに源氏が植えた若木の桜（二二二頁）が、翌年、咲き始めた。桜が見ごろになった頃、友人の頭中将が都から訪ねてくれた。源氏の住まいは松の柱（二二三頁）に竹の垣¹⁰であり、粗末ながらも風情が感じられた。二人は酒を酌み交わして、「酔ひの悲しび涙そそく春の盃のうち」（二二五頁）¹¹という漢詩を、一緒に歌った。また源氏は頭中将に、自分の無実を訴える和歌（褒美歌）を披露した。

雲ちかく飛びかふ鶴もそらに見よわれは春日のくもりなき
身ぞ

（二二六頁）

三月の初めの巳の日に、巳の日の禊¹²といって、お祓いをする

習慣があった。源氏たちが浜辺で陰陽師に祓いをさせると、急に風が吹き出し、空も暗くなり、肘笠の雨（二一八頁）という、にわか雨まで降り出して嵐になった。

以上のように竹幽本は二十七の名目を用いている。一方、蘭之園本の名目は十八で、両者に共通するものは十三ある。蘭之園本にしかないのは、「須磨」「源氏」「頭中将」と「庭のやり水」「みちのく紙」である。その五つを竹幽本が採用しなかった理由を推測すると、前の三つは巻名と他の巻にも登場する人物名だからであろう。あとの二つは寄合にはあるが、近世に流布していた青表紙本『源氏物語』では須磨の巻に見当たらないからではなからうか。

附記

本稿は、「伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（同志社大学人文科学研究所第18期研究会第17研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号25330403、いずれも平成25～27年度）における研究の一部である。

注

（1）竹幽本の巻頭に置かれた和歌を指す。巻名歌とは、その名の通り、巻の名を詠みこんだ歌という意味で、登場人物が詠んだ歌、もしくは口ずさんだ歌から選ばれる。巻名を用いた和歌が

ない場合は、その巻で詠まれた和歌の中から、巻を代表する名歌が選ばれる。ただし竹幽本では「本歌」（花散里の巻にあり）、現在の香道の流儀では「証歌」と呼ばれている。

（2）本文は小学館の新編日本古典文学全集により、そのページ数を末尾の（ ）内に付けた。なお、本文の表記には適宜手を加えた。

（3）寄合とは、ある語に対して縁のある語を指す。たとえば「野宮」に縁のある語として、『源氏小鏡』は「黒木の鳥居」などを挙げている。

（4）武居雅子氏『源氏千種香』の依拠本を探る（『総研大文化科学研究』9、二〇一三年三月）。

（5）『源氏小鏡』の系統分類は伊井春樹氏『源氏物語』注釈史の研究（桜楓社、一九八〇年）により、その本文は岩坪健『源氏小鏡』諸本集成（和泉書院、二〇〇五年）による。寄合を含むのは第一～第四系統で、第五・六系統にはない。

（6）武居雅子氏『源氏千種香』の依拠本を探る―聞きの名目と源氏寄合に注目して―（『総研大文化科学研究』10、二〇一四年三月）。

（7）寄合は「伊勢の使」であるが、その言葉は物語にはない。おそらく物語本文の「かの伊勢の宮へも御使ありけり。」（一九三頁）に依拠したのであろう。

（8）記録の名目は「波こゝもと」と「立ちくる波」であるが、物語には見当たらず、「波ただここともとに立ちくる」（一九九頁）の本文から作られたのであろう。

（9）寄合の「柴の煙」は物語本文にはなく、物語中の「煙のいと

近く時々立ち来るを（中略）おはします後ろの山に、柴といふものふすぶるなりけり。」（二〇七頁）によるものであらう。

（10）「竹の垣」は物語本文の「竹編める垣」（二一三頁）による。

（11）物語本文も記録の名目も「春の盃」であるが、寄合と蘭之園本は「花の盃」である。

（12）「巳日の褌」という寄合語は、次に引く物語の一節に基づく。

弥生の朔日に出で来たる巳の日、「今日なむ、かく思すことある人は、褌したまふべき」と（二一七頁）

葵 香

いかりなれちるれとこのみよふこの
おひひくすも我のきかん人

一 一版開く

一 十版香のれと負ふ

一 連中十人の内八人宛組合せ居席と定めて
試香と申はてし十版焚焼は後負極りて

後不後も一方試葵上方面より方と申は別
方と能流すは是き二條乃ゆは別中
葵とて即成乃系乃車華小準はかく
組は

一 一二三番の香と色は十二色の内二色降参海
十色出香は此香外は別
試し出は

一 後負の場小車二輛並置し若香長香の列

(二十六丁表)

(二十六丁裏)

かく双を同敷と消合と多き方一同先進む
同敷は多敷
同敷は同敷 同敷の方一同先退く也若柱同敷
二同進む二同退 双を持の付は進退を早く
仍るも方後より香流はじも加ふ付
又車とむき出く若乃如く進退すは付
後負の場小車二輛並置し若香長香の列
後負と申は

一 早く仍るも上より負る方進くは後

一 方進く同敷は相並付は双を持定めて
後負後退は

一 後負極く後小負るも葵を取て

一 能流中は付と能は認極尤は

(二十七丁表)

(二十七丁裏)

先同右と一結とを 一合七結と云ふは法則なり
 一合七結と云ふは法則なり 組合も後紙ハ
 吾服小直と下 切つて出帯一版一咽回つて香元（香元）
 と横敷と服小直とを後の色紙小色直と又次の一色
 と横敷（横敷）と出帯（出帯）と小直（小直）等々 横敷七版皆色紙
 結（結）と又七色と一歩交つて一版先横敷と十四版皆
 同紙と一版小色紙と一版と

一合香二反横敷は原小直中多し時々通る程と又
 香元も其心得とて大末水は原小直も火あふ小直有
 一合横敷と十四版も小直と十版香の通る小直と云々札
 歩くと初版七色小直と札七枚と記障小直と云々下
 連中法と云々後の七版又云々下

宿願板 一の札 五月雨 二の札

(三十四丁表)

(三十四丁裏)

軒の法 一の札 五月雨 ウの札
 時多 一札最少

一祀障六時多香二点横敷二点地香二点先也各
 一版の原小直と初七版と又十版香の通る下
 結と小直と横敷と後の色紙と横敷と九の

初二版結中 各二点先 合二点先
 後二版結中 各二点先 合二点先
 初二版結中 各二点先 合二点先
 後二版結中 各二点先 合二点先
 初二版結中 各二点先 合二点先
 後二版結中 各二点先 合二点先

(三十五丁表)

(三十五丁裏)

		源麿香之施				
		三原				
		木	二	ウ	一	二
名寄	若松	二	二	二	一	ウ
名寄	五枝	二	二	一	ウ	一
名寄	花菱	二	二	一	ウ	一
名寄	苗栗	二	二	一	ウ	一
名寄	手玉湯	二	二	一	ウ	一
年号	年月日					

我(若松)の施	我(五枝)の施	我(花菱)の施	我(苗栗)の施	我(手玉湯)の施	我(若松)の施
二	二	二	二	二	二
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
一	一	一	一	一	一
ウ	ウ	ウ	ウ	ウ	ウ
一	一	一	一	一	一

(四十二丁表)

